

国語Ⅰ・Ⅱにおける表現の指導

— 書く場の設定 —

山 田 夏 樹

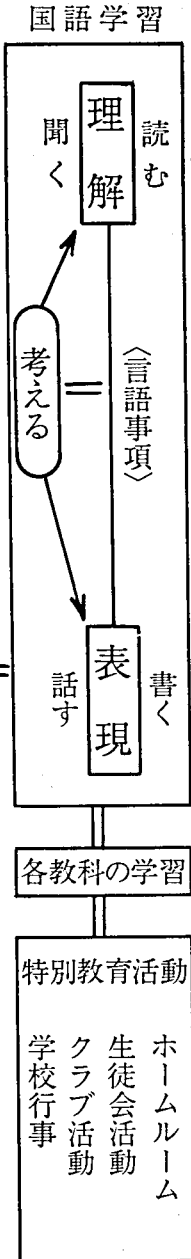
一 はじめに

私たちは、さまざまな生い立ちをもち、さまざまな環境の中で生きていく生徒たちを前にして、日々の国語の授業を進めている。大げさに言えば、国語学習の究極の目的は、こうした生徒たちがそれぞれの人生を生き抜く力を育てる・伸ばしていく、ということにあると思われる。

もちろん、このことは、独り国語科だけの問題ではない。他の教

科との連携・クラブ活動やホームルーム活動等のかかわりを無視して可能となることではない。要は、そうした幅広い学習活動の中で、国語科としてどこまで「生きる」ことの意味を考えながら生活をさせるか」ということなのである。

新学習指導要領の中で表現（とくに作文）の重視がうたわれているが、国語Ⅰ・Ⅱの表現指導がめざすものも、生き抜く力と結びついた表現活動、言いかえれば、真の学力とは何かを根底においた表現活動ということになるかと思われる。



世の中を
生き抜く力

〈国 語 〉

二 いつ、なにを書かせるか

大上段にふりかぶった前おきになってしまった。自分の実践を素直に見つめれば、思うことと行うこととはなかなか合致しないのが

実情である。

昭和五十七年度の国語Ⅰ、昭和五十八年度の国語Ⅰ・Ⅱの私自身の授業の中から「書くことの学習」をふりかえてみたい。
教科書教材は、「第一学習社」の『国語Ⅰ』『国語Ⅱ』である。

教 材	課 題
<ul style="list-style-type: none"> ○ 「冒険をめざす青春」(羽仁進) ○ 「羅生門」(芥川龍之介) ○ 詩(谷川俊太郎ほか) ※ プリント「仮細帯所にて」(峠三吉) ○ 「ことばの力」(大岡信) ○ 「夢十夜」(夏目漱石) ○ 「津軽」(太宰治) ○ 「おふくろ」(井伏鱒二) ○ 短歌(石川啄木ほか) ※ プリント 正田篠枝の作品12首 ○ 「人間の時間」(中村雄二郎) ○ 「自分への旅」(森本哲郎) ○ 「日常の思索から」(白井晟一) 	<ul style="list-style-type: none"> ↓ 「冒険」という題で筆者の考えを要約し、さらに自分の意見をつけ加える。 ↓ () 一年が過ぎた——という書き出しで、小説のつづきを書く。 ↓ 鑑賞メモと感想文。(S 57は詩の創作) ↓ 短文づくり ↓ 「夢十夜」という題で小説を書く。 ↓ 津島修治または越野たけあてに手紙文を書く。 ↓ 短文づくり(前句付け) ↓ 感想文。(プリントの歌は、鑑賞メモ) ↓ 全体を五段落に分けて、各段ごとの要約をする。 ↓ 「自分への旅」という題で作文する。 ↓ 「帽子」「自転車」「机」「スプーン」「けしゴム」の中から一つの題を選んで、思索したこ

◇他人のラケットでバドミントンをする、どうもかかってが違っ
てうまくゆかない。

◇夜更けに、坂道を野菜いっばいのリヤカーを引いて登って行く
老婆に出会った。あの老婆の生き方も、この国にあふれつつあ
る老人の生き方の氷山の一角にはかならない。

大岡信の「ことばの力」を学習した時に、短文づくりの作業とし
て、あえて右のようなことも組み入れてみた。

井伏鱒二の「おふくろ」は、人情の機微をとらえた井伏らしい作
品である。作者が久しぶりに故郷の年若い母親のところへ帰った
母は、酒好きの息子に酒を飲ませたい。しかし作者にとっての兄嫁
にあたる人に気がねして、母はなかなか酒を勧められずにいる。も
ちろん息子の健康のことを心配してでもあろうが――。そんな場面
をとらえて、私は、母親の心情を、

◇酒飲みの方が子をお前におふくろは

飲ませたくもあり飲ませたくもなし

という狂歌風なもので表現して紹介してみた。そうして、ついでに、
「知りたくもあり知りたくもなし」「聞きたくもあり聞きたくもな
し」といった下の句を提示して、これに上の句を付けてみるように
という、ちょっとした言葉遊び的な作業を試みた。

生徒から出された作品は、たとえば、

◇一回戦当たる相手は決まっちゃか

知りたくもあり知りたくもなし

◇夏の夜誘われまし肝だめし

行きたくもあり行きたくもなし

などである。

言葉遊びが国語教育における表現指導とどのようなかかわりを持
つのか異論もあろうとは思いますが、書くことの作業の中にこうした言
言葉遊び的なものを取り入れることで、生徒がそうしたものをきっか
けに、鉛筆をもつ・文字を書いていく、といった動機づけにはなる
と思うのである。

かなり以前のことだが、ラジオの番組に「トンチ教室」というの
があった。先の例のような「前句付け」とか「おりこみどいどいっ
とかいったものである。「おふくろ」という文字をおり込んで
「七七七五」にしてみる。内容的にも随筆の「おふくろ」にかか
わりをもたせることにすれば、教科書教材と密着した表現学習とい
うことにもなるだろう。

先日、高校時代の日記を久しぶりに開いてみたら、「螢雪時代」
の中にある「螢雪ユーモア」に深く興味をもって自分を見出し
た。そのあたりから発展して俳句とも川柳ともつかぬ五七五の作品
をいくつも書きつけている自分の姿も、日記の中にあつた。

授業で俳句教材を扱って、その際生徒たちに俳句を作らせてみる
と、教材の読解とはおよそ次元の異った作品が次々と出てきてがっ
かりさせられるのだが、川柳的な世界を基盤にしての作品にまで考
えを及ぼせば、案外評価の観点も違ってくるのかも知れない。

最近テレビで放映されている「欽ちゃん」の番組なども、その
意味では一つの手がかりになるのではないかと思ったりもする。迎
合は厳に戒めねばならないが、生徒たちの置かれている状況を基盤
にして、そこから生活を見つめ、自分を見つめ、人生を見つめると

いった方向もあるのではないかと思うのである。

(2) 個の拡充のための表現活動

教科書教材の冒頭に、一年生で「冒険をめざす青春」(羽仁進)二年生で「自分への旅」(森本哲郎)が置かれていることは、それなりの意味をもっていると考えられる。

高校入学という人生の新しい出発に際して、豊かな人間の可能性を探り自分の心を見つめる。あるいは、高校生活一年間を過ごした段階で、人生というものを考えてみる。人生とは自分への旅であり、だからこそその人生はそれぞれの人にとって無限の意味を持ち得るのだと認識する。

このことは、教材を読むという営みの上にさらに「書く」という営みを加えることによって、より深みを増していくと考えられる。課題作文とか要約文に自分の意見をつけ加えるとかのことは、どの国語科の教室でもなされている作業であるが、私自身もとり入れてやってみた。

「ひとも一生 われも一生」と言う。他者にそれぞれの人生があるように、自分自身にも一度だけの人生がある。刹那的でもなく享乐的でもない、意義のある人生を送りたいものである。そのための手だてとして、自己をどのように拡げどのように充たしていくことを考えたらよいのか。国語科としての授業の中で、そのことを行ういとぐちをどこに見つければよいのか。

◎ 思索文

白井晟一の「日常の思索から」は「無窓」から採られた教科書に

してわずか四ページほどの短い教材である。私たちの生活に密着した《眼鏡》《箸》という二つのものについて、それぞれ筆者の思索が示されている。日常何げなく見たり使ったりしているものでも、ほんの少し視座を変えることによって新しい発見をすることがある。「気づくこと」「気をつけること」の大切さを示唆した教材と言えるだろう。二年生の初めの頃のこの教材を読んだ後で、次の題材のいずれか一つを選んで思索的な文章を書くように勧めてみた。

自転車 スプーン 机 帽子 消しゴム

次に示すのは、その作品例である。

帽子

—— 日常の思索から ——

最近、帽子をかぶっている人を見かけることが多くなった。ファッション雑誌などの影響で、若い女性もかぶるようになったのだろう。しかし、防暑・防寒用はともかく、あまりきまり過ぎて(服だけが)、何となくおかしい人もいる。やはり帽子は、おしやれ用という意識が抜けないのだろう。

イギリスの紳士は帽子をかぶらないで外出することはないという。今では昔となったが、女性の白いはだが何より尊重された時代、彼女たちも帽子をかぶらないことはなかったらしい。しかし、日本は豊耕社会、ふきんではおかむりしたぐらいだった。つまり、防暑やほこりから髪を守るぐらいしか需要がなかったのだ、必然的に帽子の供給はなかったのだろう。確かに、身分の高い貴族たちが帽子を

かぶっている者はいたが、形式・慣例によるものだったようだ。

そうした背景から、帽子が日本人一般にかぶられるようになるには、文化がそうさせるよう動かなければ無理のようだ。つまり、外国から帽子を借りてきましたという形ではなく日本人自身でアレンジした自分たちに以ていう帽子をつくらなければ、まだまだファッションの域をそれが出ることはないだろう。

④手紙文

機械文明が発達し情報化社会がますます複雑になっていく中では、人と人とのかわり方も以前とはずいぶん違ってきているように思われる。電話一本で用が足りるのだから、時間も手間もかかる手紙など次第に億劫になっていくのが一つの流である。

しかし、人は、書くことによって考える。書いたものを読み直すことで自己の考えの妥当性を確認する。電話による瞬間的なことばのやりとりでは相手を思いやったり自分を省みたりする余裕はないが、手紙の場合はそれが可能である。

一年生で小説教材「津軽」(太宰治)を扱った際に、登場人物の津島修治または越野たけ宛てに手紙文を書く作業をとり入れてみた。手紙かあ、というどよめきが教室の中に広がった。暑中見舞状や年賀状さえも書くことを苦にする高校生たちも多いのである。しかし作業を進めていくうちに、生徒たちも結構乗ってきたようであった。小説として読んだ文章の中の登場人物たちが、手紙文を書くとうとすることで生徒たちに一歩近づいて来たのかも知れない。

国語を苦手とするT君の作品を示しておきたい。私が紹介した《拜啓》《敬具》などの古めかしいことばが使っているのも、せい

いっぱい敬語を用いようとしていささかぎくしゃくしてしまった文
体とあいまって微笑ましい感じさえする。

拜啓

この世を去られて私達の知らない死後の世ではどのようにお過ごしでしょうか。あなたがいらっしやうたここ日本では今、朝晩めっきりと寒くなり、もう季節は冬になろうとしています。

ところでなぜあなたにお手紙をお出ししたかと申しますと、つい最近、基町高等学校の現代国語の授業で、あなたがお書きになった「津軽」を少しながらも読ませていただきましたので、それについて少しお手紙にしようと思ってお出ししました。

この小説は、あまり聞いたこともない方言と素朴な津軽の人々によってかもし出される雰囲気がとても良かったと思われました。そしてあなたが乳母のたけにお会いするために小泊にいらっしやうた、三十年ぶりに再会したたけの飾けのない愛情に接し安らぎをおぼえられて、あなたがたけに似ていることを発見したことでお喜びになった気持ちには、この小説を読んでとてもよく感じられました。ではたけさんによりしくお伝えください。

敬具

T・K

津島修治様

十月十日

⑤創作文

想像力の豊かさ貧しさは、その人の人生を豊かにするかどうか

もかわりをもってくる。國語科の授業において、詩や短歌や俳句の創作をとり入れることは、生徒たちの想像力がその中で働いてさらに高められていくことを願うのであろう。それを散文の世界にも及ぼしていきたい。

文学的な文章、特に小説の場合、読者の柔軟な思考と想像によって、登場人物の性格・心理・思想をとらえ、人間関係をとらえ、作者の発想や意図をとらえようとする。逆にもし私たちが小説を書くこととする立場に立つとしても、性格・心理・思想・主題を表すための思考力と想像力が要求されるはずである。

一年生の「羅生門」(芥川龍之介)「夢十夜」(夏目漱石)二年生の「バッタと鈴虫」(川端康成)などの小説鑑賞の授業の中で、創作文・小説を書くことの作業をとり入れてみた。

小説かあ、という声の手紙文の時と同じように教室内にうず巻く。机上の原稿用紙を前にして生徒たちはなかなか鉛筆を手にしようとならない。そのうち一人二人、文章を書くことにあまり抵抗感のない生徒がまず何かを書き始める。やがてしばらくして、クラスの大半の生徒たちが原稿用紙に文字を埋めている状況となる。当初は困っている風情の生徒たちも興がのると案外書くものではある。周囲の者にわざと読ませてみたり、隣の席の原稿用紙をのぞき込んでみたり。二枚三枚と追加の原稿用紙を申し出る者も現れる。

中に二、三人、どうしても書けない様子の生徒がいる。想像力が働かないせいなのか、思考することの苦手なせいなのか。机間巡視をしながらそんな生徒にアドバイスを加えてみる。

「まず、登場人物をきめてみる。男か女か、何歳くらいの人間に

するの。どんな性格の人物なのか。どんな事件をつくってみるか。その文章の中で君はどんなことを訴えてみるか——いやいや、まあ、そんなめんどうなことは後回しにして、とにかく最初の一行を書いてみたら?」その時彼は湖のほとりに立っていた」とか「秋の日暮れのことである」とか……」

「夢十夜」(夏目漱石)のところでは、「夢一夜」という題を提示して原稿用紙を配った。

作品例を次に示しておきたい。一年生男子生徒の作である。

夢一夜

目が覚めた。目の前はまっ白だった。だだっぴろい部屋の中に自分が立っていた。ドアが六つあった。自分はドアの前に立った。

一つめのドアをあけた。太陽の光が目の中にとびこんできた。熱い。見わたすかぎりの砂。

二つめのドアをあけた。くらやみだった。ふくろうの声。虫の音。冷たい空気。見わたすかぎりの木。

三つめのドアをあけた。赤い太陽が目の中にとびこんできた。波の音。潮風。見わたすかぎりの水。

四つめのドアをあけた。日の光がない。いおうのにおい。けむりのうず。見わたすかぎりの岩。

五つめのドアをあけた。今までとはどこかちがう日の光。今までとはどこかちがう空。今までとはどこかちがう空気。今までとはどこかちがう音。見わたすかぎりの人。見わたすかぎりの建物。一歩、二歩、歩きはじめた。規則正しい足音。冷たい視線。自分は何もどりたいと思った。

六つめのドアをあけた。まぶしいばかりの太陽。ふきとばされそうな風。見わたすかぎりの雲。見わたすかぎりの空。自分は飛びたいと思った。次のしゅんかん、体がふわつとういた。落ちていく。雲をつきぬけ、どこまでも、どこまでも……。

㊦ 課題図書と読書の記録

本を読むことの少なくなった高校生たちである。どのようにして彼ら彼女らに本を読むことを勧めていくか。どのようにすれば彼ら彼女らが積極的に本を読むようになるのか。適切な指導方法も見つからぬまま、そうして、依然として押しつけの観は免れないけれども、現在のところ他の先生方と相談して学年ごとの課題図書を選定をし、読書の記録の提出を求めている。ひと月に一冊あるいはふた月に一冊といったところでの課題図書である。

※読書の記録（昭和58年の提出作品はすでに生徒に返却してしまっ

たので、59年度のものを示すことにしたい）

※課題図書

◇昭和57年度（二年生）	◇昭和58年度（二年生）
<ul style="list-style-type: none"> ○ 羅生門・鼻（芥川龍之介） ○ 人とき合う法（河盛好威） ○ 城の崎にて（志賀直哉） ○ 三四郎（夏目漱石） ○ 原爆に夫を奪われて（神田三亀男） ○ 幼年時代（堀辰雄） ○ 老人と海（ヘミングウェイ） ○ 掌の小説（川端康成） ○ 桜の実の熟する時（島崎藤村） 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 李陵・弟子・名人伝（中島敦） ○ 敦煌（井上靖） ○ 黒い雨（井伏鱒二） ○ カナダエスキモー（本多勝一） ○ ことばへの旅1（森本哲郎） ○ さぶ（山本周五郎） ○ ころろ（夏目漱石）

書名	ヘンリ短編集（一）	著者名	O・ヘンリ	発行所	新潮文庫	読書期間	月 日（ ） ～ 月 日（ ）
一、全体（テーマ・構想・大意）について	<p style="text-align: center;">警官と讚美歌</p> <p>大意 マジソン・スクエアに冬が近づいた。ソービーは冬ごもりの住居として島の刑務所を選んだ。そこは食事とベットと気の合った仲間が保証される。刑務所に入るためにソービーは罪を犯そうと努力して、しかし、その度に失敗し警察にはつ</p>						
二、感想	<p>この作品を読んでもまず始めに考えたことは作者O・ヘンリーについてです。この作品からだけでもニーモアにとんだ、ほのぼのとした温かさをもった人だとわかります。私は最後の四行のおちがとても好きです。普通なら「ソービーがまじめになつた」というふうに関わりそうなのですが皮肉なことにそこでつかまるなんて、世の中が自分の思っている通りにはいかない</p>						

かまらなかつた。ソープはある街角で教会を見つけた。そこからオルガンの美しい音を聞いているうちに、まともな人間になって、仕事をしはじめに生きようと考へた。その時警察官につかまり翌日軽犯罪裁判所で、ソープは「禁固三ヶ月」の言い渡しを受けた。

(3) 戦争・原爆・平和等をテーマとすを表現活動

国語科の学力も、究極的には人生を生き抜く力ということになるとするなら、授業を通じて戦争や平和の問題を考へていくことはけつしてなおざりにできない重要課題である。とりわけ、現在広島の地で生活している若者たちにとっては、人類最初の悲惨な被爆体験を原点とする戦争体験の継承——そのことを通して生命の尊厳・人間の尊厳を理解し平和実現を志向することが重要課題である。

かつての子供たちの時代は、祖父母や父母から原爆や戦争の体験を聞きながら育つという時代であったが、今後そうした戦争の体験者は次第に数が少なくなっていく。その時私たちが素材として選ぶのは、時代の記録でありあるいは文学作品である。生徒たちに、そうした記録や文学作品を提示し、彼らが人生を考へ生命の重みを考へる機会をつくりたい。

⑦小説教材の場合

二年生で「野火」(大岡昇平)を鑑賞した際には、「戦争と人間——「野火」を読んで——」という題で文章を書くことを勧めてみ

ことが書かれてありました。そしてこの分節は読者に強烈な印象を与えたいと思います。また、このおちがあるからこそ文章全体が生きてくるのだと思います。

た。

戦争と人間

——「野火」を読んで—— 組 番 氏名

戦争はいろいろな形で多くの人々を苦しめる。

兵士は実際の戦闘で死んだり、負傷を被る。熱帯地方の戦地に行けば、戦闘の恐怖だけでなく、危険な生物やいろいろな風土病によつて、まわりは敵だらけになる。常に孤独である。その上どこへ行つても食糧不足がつきまとう。食べる物もなく、空腹のまま眠ろうとする。でも眠れない。銃声が聞こえれば、夜中であろうと、跳び起きすぐに闘う準備をしなければこつちが殺られる。殺るか殺られるか、これが戦争だ。

この「野火」にも食糧不足のことが最初から最後まで描かれていた。いかに、戦時中の食糧難が大変だったかがわかる。医者が診療するのでさえ、食糧を持っていなければ、その患者を見ようとはしない。いくら金があつてもだめ。本当に最後の最後まで、戦争によつて追いつめられた人間の姿みたいだ。

また、戦争は何の関係もない人達を次々に捲き込んでいく。太平洋の島々では、侵略者によって、強制労働あるいは理由もなく殺される。同じ人間同志であるにもかかわらず、原住民たちは、鉄砲を持った兵隊に服従させられ、そういう兵隊たちを憎むようになるだろう。つまり、戦争は人間関係をも破壊してしまうことになる。(後略)

先に、小説教材を扱った際に小説を書く時間をくみ入れたことについて触れたが、二年生段階で自由題での小説を書かせた時には、「広島再び……」といった題などで何人かの生徒たちが戦争や原爆を素材にした作品を書いていた。最近のアニメ映画の影響だろうか、戦闘場面に力を入れて書いているものもあって気にはなつたが、想像力が生命の尊厳に向かって働くような表現活動のあり方を、今後とも考えていく必要があると思つている。

④短歌教材の場合

57年度・58年度ともに近代短歌の学習をしたのは一年生時である。その際正田篠枝の短歌作品の中から十二首を選んで、補助教材として生徒たちに示した。それぞれの歌を讀んで心に浮かんできたことを余白に鑑賞メモのかたちで記入していく、ということを試みたのである。たとえば、

◇太き骨は 先生ならむ そのそばに 小さきあたまの骨 あつまれり

の歌について、

「これは『教師と子供の碑』だったか、像をみた時に讀んだことがある。『先生 先生』と叫んだ子供らをしつかり抱きしめた教師の

姿が目につかふ。その子らは先生をたよれば何とかなると思つたのだろう。あの炎の中でも」

と書いているのを見ると、惨禍の中で幼い子供たちが懸命に先生のところに群がっていく、そういう生への志同のイメージを鑑賞者は思い浮かべて言葉にあらわそうとしたのだと考えられる。また、「太き骨」と「小さきあたまの骨」で先生と生徒を対比してある。

先生のまわりに生徒があつまっているのではなく、骨になつた先生のまわりに骨になつた生徒があつまっているのは悲劇だ。死体があつまっているよりも骨があつまっているという方がよりおそろしい」

という鑑賞メモからは、この生徒がとらえた「骨」ということばのもつ重みが伝わってくるようにも思つた。「骨」ということばの重みを意識することは、同時に、いのちの重みを意識することにもつながっていくのではないかと考えるのである。

⑤詩教材の場合

一年生の詩の単元には谷川俊太郎など四氏の詩人の作品が載つていた。これらの詩を鑑賞した後、「原爆詩集」(峠三吉)の中から「飯包帯所にて」を選んで、プリントし配布した。用紙の上半分に作品が印刷してあり下半分が空らんになっている。詩の一行一行をたどりながら心に浮かんできたことを鑑賞メモにかけたで記していくことを勧めたのである。

さらに、夏休みの課題図書で「原爆に夫を奪われて」(神田三龜男)を取り上げた関係もあって、

——「原爆に夫を奪われて」に寄せて——

を副題とした詩を書くことをも課題としてみた。詩としてことばをつらねようとすれば思考をせねばならない。イメージも働かせなければならぬ。そうした中で生命の重みを意識し平和への志向の心が育っていくことを期することはできないかと思うのである。

以下、生徒の作品例を示しておきたい。資料になるものを生徒に返却しているので、「広島市立高等学校編『研究紀要』」で紹介したものと重なるのであるが、資料のダブリについてはお許しいただきたい。

△生徒作品例▽

詩	鑑賞メモ
<p>—前半— 何故こんな目に遭わねばならぬのか なぜこんな目にあわねばならぬのか 何の為に なんのために そしてあなたたちは すでに人間がどんなすがたで にんげんから遠いものにされは ててしまっているかを知らない ただ思っている</p>	<p>省略— 。戦争のため国のため……とな ぜ死ななければならぬのか。 どうしてこんなにまでひどい殺 され方をされなくてはならない のか。作者の平和への思いが大 くされていると思いがたくされ ていると思う。わずかにあいた 目のすきまからは恐ろしい生地 獄が見えて、自分の姿は見えな い。隣にねているのが自分の友 ともわからないだろう。 。家族のこと・家のことを考え</p>

あなたたちは思っている
 今朝がたまでの父母を弟を妹を
 (いま逢ったってだれがあなた
 としりえよう)

そして眠り起きごはんを食べた
 家のことを

(一瞬に垣根の花はちぎれいま
 は灰の跡さえわからない)

おもっているおもっている
 つぎつぎと動かなくなる同類の
 あいだにはさまって

おもっている
 かって娘だった
 にんげんのむすめだった目を

ている女学生は、以前の愛らし
 い女学生ではない。

又女学生が思っている家族や家
 も、女学生と同じように変りは
 ててしまっているだろう。

。自分と同じめに合った人々が
 次々と死んでいく。ひととは思
 えないようなその人々の間には
 さまって、かつての女学生の頃
 のことを思い出している。この
 女学生たちは死ぬかもしれない
 ということを感じつつ、それ
 もかつての娘だった時を思い出
 して、生きたいと思いつづけて
 いるのだろう。

△生徒作品例▽

ピカ後家の遺言

—「原爆に夫を奪われて」に寄せて—

今わたしたちは幸せです

しかし 決して忘れてはいない
戦争のむごさを 原爆の恐ろしさを
孫に伝えたい
このことだけは

昭和二十年八月六日の朝だった
夫も私もまだ若かった

朝早くから起き出し
今日で終わるからと
家を出ていった夫

いくら待っても帰って来ない
必ず生きていると信じて
広島中をさがして歩いた
遠いとは思わなかった

草葉の陰から
夫が見守ってくれていると思つて
生きてきました
子供を一人前にしようとして
生きてきました

苦しかったあの頃も
今は思い出話です
伝えましよう
伝えて下さい
何もかも奪ってしまった
戦争のこと
原爆のこと
こんな時代だからと
思うのです

三 おわりに

以上、協議会の発表資料をもとに実践例のいくつかを紹介してきました。こうして改めて文字化してみると思いつきの域を脱していない、したがって、しっかりした体系づけがなされていないことに思い至るのであるが、すでに約束の枚数がきてしまった。今後の私自身の課題としなければならぬことを項目別に記し結びのことばとしたい。

- (1) 国語Ⅰ・Ⅱの「総合化」の問題（たとえば、現代文と古典との「総合」を「表現の指導」とかわりをもたせて考えること。
- (2) 中学校段階でなされている表現学習の実態の把握とそれに立脚した高校段階での指導法を研究すること。
- (3) 年間の授業展開を見通した中で「書く場」「書く内容」の体系化をはかること。
- (4) 「話すこと」の学習における表現指導のあり方を研究すること。

（広島市立基町高等学校教諭）